

# 被災地の 子どもたちのいま

被災から1年半たって、沿岸部での子どもたちの状況と問題をもっと理解するため、学校や幼児教育などの関係者から聞き取りをしました。

以下は、当会が活動している大槌町や釜石市に限らず複数の市町村の

いろいろな方からお聞きし、共通点をまとめたものです。写真は大槌子どもセンターの様子です。本文とは関連しません



大槌町の子どもセンターには200人近い子どもが登録をしていて、普段も30人前後、イベントの時には40人もの子どもが遊びにきます。畑で作った芋を焼いて。

居していた祖父母や親しい叔父伯母を亡くしていた子どものことは最近まで分らなかったんです。「“死んだほうがいい”という子が幼稚園で仲の良かったお友達を亡くしていることを知らされた」。

大きなストレス、親しい人を悼む時間的な余裕を持つことができなかった子どもたちが息切れをしているのでしょうか。被災したときにすでに小学校に通っていた子どもたちにとっては、学校の先生や友達との関係が、心理的に大きなプラスになったことをたくさん見てきましたが、小学校入学という大きな変化にあたった子どもたちにとってはまた別の問題があったのだということを改めて知りました。

保護者を亡くした子どもたちはどうしているでしょう。「残された父や母を一生懸命に励まして、無理をしても明るくふるまっている子どもたちが多いですね」。「痛々しくて、そんなに頑張らなくていいんだよ、と抱きしめてやりたいです」。

## 風におびえる子どもたち

思っていることを表現できない小さな子どもたちにフラッシュバック（過去の怖い体験の記憶があるきっかけで再発する）が現れている問題もあります。「強い風の日、幼稚園か

## 2年生のストレス

「赤ちゃん返りをしている子どもが多いですね」。「僕なんていない方がいいんだ」なんて言いだして。2年生が虚無的なんです」。

昨年の入学式。被災地には日本中からランドセルが届けられ、ピカピカのかわいい1年生は復活への象徴だったように思います。多くの子どもたちが避難所から入学式に出席し、周りの人たちも一緒になって喜び合いました。それから1年半。2年生になった子どもたちのことを心配する声がいよいよなところで聞かれま

した。

「この子たちは、家や家族などを失ったという大きなストレスを受けて1カ月もたたないうちに、小学校入学という大きな環境の変化に直面しました。避難所から通学バスで遠くの学校に行かなければなりません。新しい人間関係を作る時期ですが、学校の多くも被災したので、普段のような落ち着いた環境ではありません。1年間必死で頑張ってきた子どもたちが、ストレスを感じているのだと思います。」

「保護者を亡くした子どものことは入学前に分かっていましたが、同

からお散歩に出かけると、風の音におびえて泣き出す子たちがいます」。[避難訓練のサイレンの音にパニックを起こす子どもたちがたくさんいます]。「夜眠れない、おもしろをするといった傾向は続いています」。幼稚園や保育園の多くは流されたため、コンテナやプレハブが園舎になっているところも多いのですが、「泣き声や騒ぐ声が反響して、落ち着くのが難しいです。大人でも耳を覆いたくなる時があるので、子どもはもっと大変でしょう。」

幼稚園や保育園の先生たちのほとんどは地元出身なので、自身も被災されています。自分のストレスも抱えながら、他の人のストレスを引き受けなければならない仕事です。

「子どもの成長を待つことができなくなってしまって、言うことを聞かない子どもに声を荒げることがあるんです。以前はこんなことはなかったのに」という声を聞きました。また、学校や保育園などでは集団で避難した子どもたちは岩手県の場合はほぼ全員が無事だったのに、お迎えが来て家に帰った子どもの中には亡くなった方がかなりいますが、そのことがトラウマになっている先生や保育士がたくさんいます。「毎月11日になると自責の念にかられ平静ではいられないんです。子どもたちの前で涙ぐんでしまったことがあります」。

## 新たな問題も

被災地では、震災から1年半たって、明るい面と暗い面の乖離が進んでいます。ビジネスを再開したり、家を建てることのできた人がいる一方で、一家の働き手を失ったなどで生活再建ができない人がたくさんいます。復興の青写真が明確でない市町村もたくさんあります。地場産業が壊滅したままのところがあります。

「家族ごとの経済力や生活の差が



センターの畑で収穫した芋を使って焼き芋会をしました。

[写真右]内陸の遠野市からもらったお化けかぼちゃを使ったハロウィンのイベント。

目立ってきました。こうした状況は子どもたちにも大きく影響しています。学校でも日曜日に住宅展示場に行ったという話が出たりします。」

「仮設住宅で勉強に集中したりすることは難しいし、被災を機に離婚や家庭内暴力、ネグレクトなどの虐待も増えているようです。「家でご飯をちゃんと食べていないような感じの子が見受けられる」とも聞きました。

全国的な「いじめ問題」は被災地でもクローズアップされ、被災後だけに保護者も普段以上に神経質になっています。いじめ問題に関する書類がたくさん求められ、家庭訪問の回数も増える等、どこでも先生の仕事が増えます。「子どもと向き合う十分な時間が取れない」状況です。

また、世界的に問題になっている「発達障害」など、子どもたちの抱える現代的な問題に被災地も無縁ではありません。被災のストレスがこうした傾向を助長しているように思われます。ただでさえ集団生活が難しい子どもたちにとっては、落ちつかない環境や周囲の大人の余裕のなさ、授業に集中するとか他人との関係を築くなどをずっと難しくしてい



るようでした。そうした傾向が軽くあった子どもたちの症状が顕在化しているとも言われ、子どもに日常的に接する人たちの中には戸惑いも見られます。

## 子どもを支える大人を支える

被災から時間がたつなかで、多くの住民が疲弊してきて問題の深刻化が気になります。しかも被災地の多くは元々過疎化していた土地で、たとえば心理の専門家もほとんどいません。子どもたちには学校と家庭以外の居場所も大切だと考え、子どもセンターを作りましたが、子どもを支援する大人たちにも支援が必要とされています。当会では子どもセンターのスタッフに対する研修などを通じて、子どもを支える大人たちへの支援を進めています。